

【表紙】

【提出書類】	四半期報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の7第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2024年4月12日
【四半期会計期間】	第40期第2四半期(自 2023年12月1日 至 2024年2月29日)
【会社名】	株式会社明光ネットワークジャパン
【英訳名】	MEIKO NETWORK JAPAN CO.,LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 山下一仁
【本店の所在の場所】	東京都新宿区西新宿七丁目20番1号
【電話番号】	03-5860-2111(代表)
【事務連絡者氏名】	財務経理部長 宮川杉久
【最寄りの連絡場所】	東京都新宿区西新宿七丁目20番1号
【電話番号】	03-5860-2111(代表)
【事務連絡者氏名】	財務経理部長 宮川杉久
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

回次	第39期 第2四半期 連結累計期間	第40期 第2四半期 連結累計期間	第39期
会計期間	自 2022年9月1日 至 2023年2月28日	自 2023年9月1日 至 2024年2月29日	自 2022年9月1日 至 2023年8月31日
売上高 (百万円)	10,448	11,148	20,871
経常利益 (百万円)	1,000	899	1,243
親会社株主に帰属する四半期 (当期)純利益 (百万円)	657	519	809
四半期包括利益又は包括利益 (百万円)	740	701	1,110
純資産額 (百万円)	11,125	11,557	11,203
総資産額 (百万円)	15,275	16,372	15,811
1株当たり四半期(当期)純利益 (円)	26.20	20.62	32.17
潜在株式調整後1株当たり四半期 (当期)純利益 (円)	-	-	-
自己資本比率 (%)	72.8	70.6	70.9
営業活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	131	502	608
投資活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	284	184	307
財務活動によるキャッシュ・フロー (百万円)	283	305	588
現金及び現金同等物の四半期末 (期末)残高 (百万円)	8,136	8,406	8,285

回次	第39期 第2四半期 連結会計期間	第40期 第2四半期 連結会計期間
会計期間	自 2022年12月1日 至 2023年2月28日	自 2023年12月1日 至 2024年2月29日
1株当たり四半期純利益 (円)	22.32	21.03

(注) 1. 当社は四半期連結財務諸表を作成しておりますので、提出会社の主要な経営指標等の推移については記載しておりません。

2. 潜在株式調整後1株当たり四半期(当期)純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2【事業の内容】

当第2四半期連結累計期間において、当社グループ（当社及び当社の関係会社）において営まれている事業の内容について、重要な変更はありません。

なお、主要な関係会社の異動は、以下のとおりであります。

（その他の事業）

第1四半期連結会計期間より、株式会社明光キャリアパートナーズ及び株式会社Reverseの重要性が増したため、連結の範囲に含めております。

この結果、2024年2月29日現在では、当社グループは、当社、連結子会社12社（株式会社MAXISエデュケーション、株式会社ケイライン、株式会社TOMONI、株式会社One link、株式会社早稲田EDU、国際人材開発株式会社、株式会社古藤事務所、株式会社コース・コーポレーション、Simple株式会社、Go Good株式会社、株式会社明光キャリアパートナーズ、株式会社Reverse）、非連結子会社1社（MEIKO NETWORK VIETNAM COMPANY LIMITED）、持分法適用関連会社1社（NEXCUBE Corporation, Inc.）、持分法非適用関連会社1社（明光文教事業股份有限公司）の計16社で構成されることとなりました。

第2【事業の状況】

1【事業等のリスク】

当第2四半期連結累計期間において、当四半期報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、経営者が連結会社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があるとして認識している主要なリスクの発生又は前事業年度の有価証券報告書に記載した「事業等のリスク」についての重要な変更はありません。

2【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

文中の将来に関する事項は、当四半期連結会計期間の末日現在において判断したものであります。

(1) 財政状態及び経営成績の状況

経営成績

当第2四半期連結累計期間（2023年9月1日～2024年2月29日）におけるわが国経済は、物価高や海外経済減速による下押しはあったものの、コロナ禍からの経済活動の正常化に伴い、個人消費は持ち直しに足踏みを見せつつも緩やかな回復を見せました。先行きについては、雇用・所得環境が改善する下で緩やかな回復が続くことが期待される一方で、海外景気の下振れがわが国の景気を下押しするリスクとなっている他、物価上昇や中東情勢なども懸念される状況にあります。

当社グループの属する教育サービス業界におきましては、2023年の出生数が過去最少の75.8万人を記録し、今後さらなる学齢人口の減少が予測される中で、様々な教育制度改革が進められており、教育のデジタル化や、大学入試における総合型・学校推薦型選抜の増加などの構造変化も急速に進行しております。そのような中で、長期的・持続的な企業価値向上を目指し、同業間や異業種とのM&A・アライアンスの動きや、事業再編の流れも加速しており、大きな変革期にあります。

当社グループはこのような環境の中で、2022年8月期を初年度とする中期3ヶ年計画を策定し、中期経営方針を「ファン・イノベーション“Fan・Fun Innovation”」としました。

当社は“Purpose”“「やればできる」の記憶をつくる”を起点として“蛻変（ぜいへん）”を繰り返しながら、“人の可能性をひらく”企業グループを目指してまいります。また、FanとFunを繋ぐInnovation（＝新結合）により、ファンづくりを推進し、持続的な企業価値の向上と成長を実現します。

具体的には下記の基本方針のもとで、事業戦略・人事戦略・資本戦略を推進してまいります。

<基本方針>

Fanをつくる

- ・DXの推進と明光ブランドの深化と探索により、新たなファンを創出します。
- ・社会の変化に対応した新しい価値の提案により、まなびのインフラをひろげます。

Funをつくる

- ・“わくわく”を通じて満足と信頼に満ちたファン・エンゲージメントを育みます。
- ・働きがいのある、ウェル・ビーイングな職場づくりを目指します。

Innovation（＝新結合）をつくる

- ・常に新しい“め”でみて意識変化し、判断行動します。
- ・事業収益のさらなる向上のために、事業構造を変革します。

<中期経営計画における戦略>

事業戦略

- ・既存事業における新教室フォーマットによる新規開校と、顧客エンゲージメント向上への取り組みを強化してまいります。
- ・新規事業である人材事業への取り組みを強化することで、教育事業に続く収益の柱を創出し、社会環境の変化に強い事業ポートフォリオへの変革を図ります。
- ・DX戦略として、「全社デジタルマーケティング機能の実現」と「DXデータプラットフォームの構築」に取り組んでまいります。

人事戦略

- ・イノベーション創出のためのダイバーシティ経営の推進と、働き方改革によるウェル・ビーイングの追求に取り組んでまいります。

資本戦略

- ・事業基盤の強化・成長投資に必要な自己資本の充実と、株主の皆さまに対する安定的かつ持続的な利益還元を通じて中長期的に企業価値を高めてまいります。

当連結会計年度（2024年8月期）におきましては、中期経営方針である「ファン・イノベーション“Fan・Fun Innovation”」の「その先へ」向かう年度と位置づけました。未来社会に向けて、お客様視点に立ち、「人的資本経営」と「デジタル経営」を実現し、「高い付加価値」を創造してまいります。

「人的資本経営」につきましては、「従業員の成長こそ当社の成長」と捉え、従業員の「スキルと能力開発」、「リーダー育成とサクセッション」、「DXとCXの推進」、「ダイバーシティ&インクルージョン」、「Well being」という人的資本投資を通じ、従業員全員が自らの仕事に誇りを持ち、個々の力を発揮することで、人の可能性をひらく企業グループとなり輝く未来を実現してまいります。

「デジタル経営」につきましては、DXの実行に向けて、DX領域を「攻めのデジタル化（DI：デジタルイノベーション、DX：デジタルトランスフォーメーション）」と「守りのデジタル化（デジタイゼーション、ITインフラ）」に分けて定義を行いました。DX戦略本部の組織体制を見直すことで、QCDs（Quality：品質、Cost：費用コスト、Delivery：納期、Safety：安全性）をオペレーションDXのKPIとして捉え、オペレーション強化に努めてまいります。また、DX人材を計画的にアサイン・育成するためのリスキリング教育にも取り組んでまいります。

当第2四半期連結累計期間におきましては、上記の取り組みにより、社会環境の急速な変化に柔軟かつ迅速に対応しながら、「高い付加価値」を創造し、持続的な成長の実現を目指してまいりました。

これらの結果、当第2四半期連結累計期間の業績につきましては、売上高は11,148百万円（前年同期比6.7%増）、営業利益845百万円（同3.5%減）、経常利益899百万円（同10.0%減）、親会社株主に帰属する四半期純利益519百万円（同21.0%減）となりました。

なお、2023年10月12日の2023年8月期決算短信にて公表いたしました第2四半期（累計）連結業績予想の数値に対しては、売上高2.0%増、営業利益14.3%増、経常利益18.4%増、親会社株主に帰属する四半期純利益8.3%増と概ね計画通りの進捗となりました。

セグメントごとの経営成績は、次のとおりであります。

（明光義塾直営事業・明光義塾フランチャイズ事業）

主力である明光義塾事業（直営事業・フランチャイズ事業）につきましては、前期（2023年8月期）より、全国を5つの地域（北海道東北・関東甲信・東海北陸・近畿・西日本）に分けた「カンパニー制」による運営体制に移行した中で、カンパニー主導により、地域ごとの環境・状況に合わせた「戦略の選択と集中」を直営・フランチャイズが一体となって推進してまいりました。

中学生指導におきましては、生徒の学力に応じて取り組むべき問題が明確にわかる「明光式特許10段階学習法」を通じて、「授業の質」のアップデートを図るとともに、家庭学習サポートサービス「MEIKO!家スタディ®」を通じて、家庭学習の質と量を確保するための取り組みを推進してまいりました。

また、生徒・保護者とのコミュニケーションアプリ「明光義塾アプリ塾生証」におきましては、全国1,698教室（2024年2月末時点）で導入・活用されており、生徒・保護者のCX（顧客体験価値）向上とともに教室業務のDX改革、効率化につながっております。加えて、教室と講師の間のコミュニケーションアプリ「明光義塾アプリ講師証」につきましては、2023年9月からのトライアル運用を経て、現在は全国473教室（2024年2月末時点）で導入、講師とのエンゲージメント強化とさらなる教室運営の改善を推進しております。

これらの結果、明光義塾直営事業における当第2四半期連結累計期間の売上高は6,730百万円（当社売上高3,593百万円、連結子会社5社売上高計3,136百万円）（前年同期比5.0%増）、セグメント利益（営業利益）は817百万円（当社営業利益501百万円、連結子会社5社営業利益計316百万円）（同8.4%増）となりました。教室数は474教室（当社直営253教室、連結子会社5社計221教室）、在籍生徒数は30,218名（当社直営16,997名、連結子会社5社計13,221名）となりました。

また、明光義塾フランチャイズ事業における当第2四半期連結累計期間の売上高は2,077百万円（前年同期比2.2%減）、セグメント利益（営業利益）は651百万円（同15.8%減）、教室数は1,278教室（連結子会社5社除く。）、在籍生徒数は63,197名（連結子会社5社除く。）となりました。

(日本語学校事業)

連結子会社である株式会社早稲田E D U (早稲田E D U日本語学校)及び国際人材開発株式会社(J C L I日本語学校)による日本語学校事業につきましては、「進学教育(大学院・大学・専門学校)」「美術基礎教育」「E J U (日本留学試験)対策」「就職支援(在留資格:技術・人文知識・国際業務、特定技能)」などの強み・特色を活かした学生募集活動・事業運営を進めてまいりました。なお、早稲田E D U日本語学校と比較して、生徒数の回復がやや遅れていたJ C L I日本語学校におきましては、2023年10月入学者数が増加したことにより、大きく改善を見せました。

これらの結果、日本語学校事業における当第2四半期連結累計期間の校舎数は2校(早稲田E D U日本語学校1校、J C L I日本語学校1校)、在籍生徒数は1,667名(早稲田E D U日本語学校873名、J C L I日本語学校794名)となり、売上高は667百万円(前年同期比23.5%増)、セグメント利益(営業利益)は111百万円(前年同期比108.9%増)となりました。

(その他)

自立学習R E D事業につきましては、A Iタブレットを活用した個別最適化された学習カリキュラムにより、自分から勉強する力を育む自立学習塾として、株式会社スプリックスと緊密に連携を取りながら、直営教室による運営ノウハウの確立と、フランチャイズ教室の増加により、ブランドの価値向上を推進してまいりました。

これらの結果、自立学習R E D事業における当第2四半期連結累計期間の教室数は91教室(当社直営22教室、フランチャイズ69教室)となりました。

キッズ事業(アフタースクール)につきましては、地域への発信を強化し、事業の存在価値を広げていくべく、直営スクール「明光キッズ」のほか、私立小学校等からの運営受託、民間学童クラブ(助成型)、公設民営、フランチャイズ等、様々な運営形態を取りながら、お客様から信頼され満足度の高いスクール運営と質の高いサービス提供に取り組んでまいりました。

これらの結果、キッズ事業(アフタースクール)における当第2四半期連結累計期間のスクール数は30スクール(直営6スクール、フランチャイズ及び運営受託等24施設)となりました。

明光キッズe事業につきましては、オールイングリッシュの学童保育・プリスクールとして、学童保育の需要拡大と幼児英語教育への関心の高まりといったお客様ニーズに対応した取り組みを推進してまいりました。

これらの結果、明光キッズe事業における当第2四半期連結累計期間のスクール数は10スクール(当社直営4スクール、フランチャイズ6スクール)となりました。

外務省より受託したE P A(経済連携協定)に基づくベトナム人看護師・介護福祉士候補者に対する訪日前日本語研修事業につきましては、これまでに培った日本語教育・日本文化理解教育の経験を最大限に活用し、質の高い教育の提供を追求してまいりました。

連結子会社である株式会社明光キャリアパートナーズにつきましては、日本人の新卒・第2新卒に特化した人材紹介事業や、外国人材紹介事業(特定技能人材等)、外国人材向け教育・研修事業を展開してまいりました。加えて、それらのノウハウを活かし、経済産業省「リスキリングを通じたキャリアアップ支援事業」の補助対象事業として、一次公募に続き、二次公募の採択企業として選定されました。なお、同支援事業は、2023年12月に2年間(令和8年度末まで)の事業期間延長が発表されております。

連結子会社であるS i m p l e株式会社による保育士・栄養士の転職支援サービスにつきましては、お客様満足度の高いサービス提供を行いながら、生産性向上に向けた取り組みを推進してまいりました。

連結子会社であるG o G o o d株式会社につきましては、デジタルの力で新たな市場を開拓すべく、デジタル広告・動画広告事業やメタバース(3D仮想空間)事業などの展開に加えて、新規事業の企画開発を推進してまいりました。

連結子会社である株式会社古藤事務所による学校支援事業(入試問題ソリューション)につきましては、業務の質の向上と確実な遂行により、堅調な業績推移となりました。

その他の事業の当第2四半期連結累計期間の業績合計は、上記以外の事業も含めて売上高は1,674百万円(前年同期比21.5%増)、セグメント損失(営業損失)は52百万円(前年同期セグメント損失(営業損失)は87百万円)となりました。

<ご参考> 明光義塾教室数、明光義塾在籍生徒数及び明光義塾教室末端売上高等の推移

回次	2023年8月期第2四半期		2024年8月期第2四半期	
会計期間	自 2022年9月1日 至 2023年2月28日		自 2023年9月1日 至 2024年2月29日	
	経営成績他	前年同期比較	経営成績他	前年同期比較
明光義塾(当社直営)教室数	229	15	253	24
明光義塾(MAXISエデュケーション)教室数	95	-	97	2
明光義塾(ケイライン)教室数	41	-	40	1
明光義塾(TOMONI)教室数	42	-	42	-
明光義塾(One link)教室数	22	1	22	-
明光義塾(コース・コーポレーション)教室数	16	1	20	4
明光義塾直営教室数計	445	17	474	29
明光義塾フランチャイズ教室数	1,336	14	1,278	58
明光義塾教室数合計	1,781	3	1,752	29
明光義塾(当社直営)教室在籍生徒数 (名)	15,896	1,079	16,997	1,101
明光義塾(MAXISエデュケーション)教室在籍生徒数 (名)	6,609	135	6,365	244
明光義塾(ケイライン)教室在籍生徒数 (名)	2,736	-	2,665	71
明光義塾(TOMONI)教室在籍生徒数 (名)	2,156	12	2,054	102
明光義塾(One link)教室在籍生徒数 (名)	909	10	927	18
明光義塾(コース・コーポレーション)教室数在籍生徒数 (名)	1,169	92	1,210	41
明光義塾直営在籍生徒数計 (名)	29,475	1,034	30,218	743
明光義塾フランチャイズ教室在籍生徒数 (名)	67,355	3,886	63,197	4,158
明光義塾在籍生徒数合計 (名)	96,830	2,852	93,415	3,415
明光義塾直営事業売上高 (百万円)	6,407	272	6,730	322
明光義塾フランチャイズ事業売上高 (百万円) 1	2,123	157	2,077	46
日本語学校事業売上高 (百万円)	539	209	667	127
その他の事業売上高 (百万円)	1,378	197	1,674	295
売上高合計 (百万円)	10,448	521	11,148	699
明光義塾直営教室売上高 (百万円)	6,407	272	6,730	322
明光義塾フランチャイズ教室末端売上高 (百万円)	12,008	785	11,562	445
明光義塾教室末端売上高合計 (百万円) 2	18,415	513	18,292	122

1 明光義塾フランチャイズ事業売上高は、ロイヤルティ収入及び商品売上高等を記載しております。

2 明光義塾教室末端売上高合計は、直営教室の授業料、教材費、テスト料等の全売上高と、フランチャイズ教室の授業料等の売上高を合計したものであり、フランチャイズ教室の教材費、テスト料等の売上高は含んでおりません。

財政状態

(流動資産)

当第2四半期連結会計期間末における流動資産の残高は、前連結会計年度末と比較して351百万円増加(3.4%増)し10,772百万円となりました。これは主に、その他及び現金及び預金がそれぞれ204百万円及び124百万円増加したことによります。

(固定資産)

当第2四半期連結会計期間末における固定資産の残高は、前連結会計年度末と比較して209百万円増加(3.9%増)し5,600百万円となりました。これは主に、投資有価証券が176百万円増加したことによります。

(流動負債)

当第2四半期連結会計期間末における流動負債の残高は、前連結会計年度末と比較して85百万円増加(2.3%増)し3,844百万円となりました。これは主に、未払法人税等が317百万円増加した一方、未払費用が254百万円減少したことによります。

(固定負債)

当第2四半期連結会計期間末における固定負債の残高は、前連結会計年度末と比較して122百万円増加(14.4%増)し970百万円となりました。これは主に、繰延税金負債が73百万円増加したことによります。

(純資産)

当第2四半期連結会計期間末における純資産の残高は、前連結会計年度末と比較して353百万円増加(3.2%増)し11,557百万円となりました。これは主に、その他有価証券評価差額金及び利益剰余金がそれぞれ181百万円及び164百万円増加したことによります。

(2) キャッシュ・フローの状況

当第2四半期連結会計期間末における現金及び現金同等物(以下、「資金」という。)は、前連結会計年度末と比較して121百万円増加し、8,406百万円となりました。

当第2四半期連結累計期間における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は、次のとおりであります。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動の結果得られた資金は502百万円(前年同期比283.4%増)となりました。

これは主に、未払費用の減少額266百万円、法人税等の支払額25百万円があった一方、税金等調整前四半期純利益923百万円があったことによるものであります。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動の結果使用した資金は184百万円(前年同期は使用した資金284百万円)となりました。

これは主に、無形固定資産の取得による支出121百万円があったことによるものであります。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果使用した資金は305百万円(前年同期は使用した資金283百万円)となりました。

これは主に、配当金の支払額303百万円があったことによるものであります。

(3) 会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定

前事業年度の有価証券報告書に記載した「経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析」中の重要な会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定の記載について重要な変更はありません。

(4) 経営方針・経営戦略等及び経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当第2四半期連結累計期間において、当社グループが定めている経営方針・経営戦略等及び経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等について重要な変更はありません。

(5) 優先的に対処すべき事業上及び財務上の課題

当第2四半期連結累計期間において、当社グループが優先的に対処すべき事業上及び財務上の課題について重要な変更はありません。

(6) 研究開発活動

該当事項はありません。

(7) 従業員数

当第2四半期連結累計期間において、連結会社又は提出会社の従業員数の著しい増減はありません。

(8) 生産、受注及び販売の実績

当第2四半期連結累計期間において、生産、受注及び販売実績の著しい増減はありません。

(9) 主要な設備

当第2四半期連結累計期間において、主要な設備の著しい増減はありません。

3 【経営上の重要な契約等】

当社は、2024年2月28日開催の取締役会において、株式会社ランウェルネスの全株式を取得し、子会社化することについて決議し、2024年2月29日付で、株式譲渡契約を締結し、2024年3月26日付で全株式を取得しました。

詳細は、「第4 経理の状況 1 四半期連結財務諸表 注記事項」の(重要な後発事象)に記載のとおりであります。

第3【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	72,405,000
計	72,405,000

【発行済株式】

種類	第2四半期会計期間末 現在発行数(株) (2024年2月29日)	提出日現在発行数 (株) (2024年4月12日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	27,803,600	27,803,600	東京証券取引所 プライム市場	単元株式数は100株でありま す。
計	27,803,600	27,803,600	-	-

(2)【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2024年2月29日	-	27,803,600	-	972	-	915

(5)【大株主の状況】

2024年2月29日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (株)	発行済株式 (自己株式を 除く。)の 総数に対する 所有株式数の 割合(%)
日本スタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港赤坂一丁目8-1	2,465,500	9.72
渡邊 弘毅	東京都千代田区	2,024,500	7.99
公益財団法人明光教育研究所	東京都新宿区西新宿七丁目20-1	2,000,000	7.89
奥井 世志子	東京都千代田区	792,800	3.13
株式会社日本カストディ銀行(信託口)	東京都中央区晴海一丁目8-12	581,600	2.29
STATE STREET BANK AND TRUST COMPANY 505223 (常任代理人 株式会社みずほ銀行決 済営業部)	P.O. BOX 351 BOSTON MASSACHUSETTS 02101 U.S.A. (東京都港区港南二丁目15-1品川イン ターシティA棟)	545,000	2.15
S M B C日興証券株式会社	東京都千代田区丸の内三丁目3-1	375,400	1.48
株式会社早稲田アカデミー	東京都豊島区南池袋一丁目16-15	347,600	1.37
奥井 慧	東京都港区	300,000	1.18
株式会社ウィザス	大阪府大阪市中央区備後町三丁目6-2	231,300	0.91
計	-	9,663,700	38.11

(注) 1. 上記の他、当社所有の自己株式2,451,148株があります。

2. 株式会社日本カストディ銀行(信託口)の所有株式数には、「役員向け株式交付信託」による所有株式141,000株(発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合0.56%)が含まれておりません。

(6) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2024年2月29日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 2,451,100	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 25,320,100	253,201	-
単元未満株式	普通株式 32,400	-	-
発行済株式総数	27,803,600	-	-
総株主の議決権	-	253,201	-

(注) 1. 「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が3,900株含まれております。また、「議決権の数」欄には、同機構名義の完全議決権株式に係る議決権の数39個が含まれております。

2. 「完全議決権株式(その他)」欄の普通株式には、「役員向け株式交付信託」が所有する当社株式141,000株、議決権の数1,410個が含まれております。

【自己株式等】

2024年2月29日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数の 合計(株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数の 割合(%)
(自己保有株式) 株式会社明光ネットワーク ジャパン	東京都新宿区西新宿七丁目 20-1	2,451,100	-	2,451,100	8.82
計	-	2,451,100	-	2,451,100	8.82

(注) 「役員向け株式交付信託」が所有する当社株式141,000株は、上記の自己株式等に含まれておりません。

2 【役員の状況】

該当事項はありません。

第4【経理の状況】

1．四半期連結財務諸表の作成方法について

当社の四半期連結財務諸表は、「四半期連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（平成19年内閣府令第64号）に基づいて作成しております。

2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、第2四半期連結会計期間（2023年12月1日から2024年2月29日まで）及び第2四半期連結累計期間（2023年9月1日から2024年2月29日まで）に係る四半期連結財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人による四半期レビューを受けております。

1【四半期連結財務諸表】

(1)【四半期連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2023年8月31日)	当第2四半期連結会計期間 (2024年2月29日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	8,472	8,597
売掛金	1,038	1,016
有価証券	100	100
商品	123	134
仕掛品	13	7
貯蔵品	10	16
前渡金	28	44
前払費用	357	382
その他	309	514
貸倒引当金	34	42
流動資産合計	10,421	10,772
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	1,416	1,487
減価償却累計額	833	863
建物及び構築物(純額)	582	623
工具、器具及び備品	415	440
減価償却累計額	359	367
工具、器具及び備品(純額)	55	73
土地	48	48
リース資産	19	41
減価償却累計額	13	14
リース資産(純額)	6	26
有形固定資産合計	693	772
無形固定資産		
のれん	292	257
ソフトウェア	163	202
ソフトウェア仮勘定	20	28
電話加入権	4	4
無形固定資産合計	482	492
投資その他の資産		
投資有価証券	2,809	2,985
長期前払費用	26	26
繰延税金資産	98	127
敷金及び保証金	1,022	1,048
長期預金	100	100
その他	158	47
投資その他の資産合計	4,214	4,335
固定資産合計	5,390	5,600
資産合計	15,811	16,372

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2023年8月31日)	当第2四半期連結会計期間 (2024年2月29日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	157	276
未払金	138	129
未払費用	1,204	949
未払法人税等	166	484
未払消費税等	231	273
契約負債	1,218	1,050
リース債務	2	2
預り金	132	153
賞与引当金	445	435
その他	62	88
流動負債合計	3,759	3,844
固定負債		
退職給付に係る負債	135	134
役員株式給付引当金	36	46
従業員長期未払金	79	79
役員長期未払金	116	116
繰延税金負債	67	140
リース債務	4	27
資産除去債務	406	424
長期預り保証金	1	1
固定負債合計	848	970
負債合計	4,607	4,815
純資産の部		
株主資本		
資本金	972	972
資本剰余金	909	909
利益剰余金	11,184	11,348
自己株式	2,707	2,700
株主資本合計	10,358	10,530
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	815	996
為替換算調整勘定	29	29
その他の包括利益累計額合計	844	1,026
純資産合計	11,203	11,557
負債純資産合計	15,811	16,372

(2) 【四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書】

【四半期連結損益計算書】

【第 2 四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第 2 四半期連結累計期間 (自 2022年 9月 1日 至 2023年 2月28日)	当第 2 四半期連結累計期間 (自 2023年 9月 1日 至 2024年 2月29日)
売上高	10,448	11,148
売上原価	7,755	8,369
売上総利益	2,693	2,778
販売費及び一般管理費	1,816	1,932
営業利益	876	845
営業外収益		
受取利息	5	5
受取配当金	10	12
持分法による投資利益	51	7
投資事業組合運用益	-	0
受取賃貸料	8	8
貸倒引当金戻入額	5	4
助成金収入	0	-
違約金収入	-	14
その他	50	9
営業外収益合計	131	61
営業外費用		
投資事業組合運用損	5	-
賃貸費用	1	0
支払利息	-	0
その他	0	6
営業外費用合計	8	7
経常利益	1,000	899
特別利益		
固定資産売却益	0	0
投資有価証券売却益	149	32
持分変動利益	-	5
特別利益合計	150	38
特別損失		
持分変動損失	9	-
固定資産売却損	0	-
固定資産除却損	0	9
店舗閉鎖損失	-	4
特別損失合計	10	14
税金等調整前四半期純利益	1,140	923
法人税、住民税及び事業税	417	438
法人税等調整額	64	34
法人税等合計	482	404
四半期純利益	657	519
親会社株主に帰属する四半期純利益	657	519

【四半期連結包括利益計算書】

【第2四半期連結累計期間】

(単位:百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自 2022年9月1日 至 2023年2月28日)	当第2四半期連結累計期間 (自 2023年9月1日 至 2024年2月29日)
四半期純利益	657	519
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	80	181
持分法適用会社に対する持分相当額	2	0
その他の包括利益合計	82	181
四半期包括利益	740	701
(内訳)		
親会社株主に係る四半期包括利益	740	701

(3)【四半期連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自 2022年9月1日 至 2023年2月28日)	当第2四半期連結累計期間 (自 2023年9月1日 至 2024年2月29日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前四半期純利益	1,140	923
減価償却費	82	93
無形固定資産償却費	3	23
のれん償却額	64	67
貸倒引当金の増減額(は減少)	4	8
株式給付引当金の増減額(は減少)	9	-
役員株式給付引当金の増減額(は減少)	8	9
賞与引当金の増減額(は減少)	36	22
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	6	0
受取利息及び受取配当金	15	17
支払利息	-	0
持分法による投資損益(は益)	51	7
投資事業組合運用損益(は益)	5	0
受取賃貸料	8	8
賃貸費用	1	0
投資有価証券売却損益(は益)	149	32
固定資産売却損益(は益)	0	0
固定資産除却損	0	9
持分変動損益(は益)	9	5
売上債権の増減額(は増加)	8	52
棚卸資産の増減額(は増加)	19	11
仕入債務の増減額(は減少)	110	121
未払消費税等の増減額(は減少)	37	35
未払費用の増減額(は減少)	219	266
助成金収入	0	-
違約金収入	-	14
その他の資産の増減額(は増加)	100	338
その他の負債の増減額(は減少)	453	126
小計	639	495
利息及び配当金の受取額	14	18
利息の支払額	-	0
助成金の受取額	0	-
違約金の受取額	-	14
法人税等の支払額	522	25
営業活動によるキャッシュ・フロー	131	502
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形固定資産の取得による支出	84	79
有形固定資産の売却による収入	2	0
無形固定資産の取得による支出	55	121
投資有価証券の取得による支出	113	4
投資有価証券の売却による収入	150	32
差入保証金の差入による支出	72	20
差入保証金の回収による収入	1	0
定期預金の増減額(は増加)	3	3
その他	107	11
投資活動によるキャッシュ・フロー	284	184

(単位：百万円)

	前第2四半期連結累計期間 (自 2022年9月1日 至 2023年2月28日)	当第2四半期連結累計期間 (自 2023年9月1日 至 2024年2月29日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
配当金の支払額	278	303
リース債務の返済による支出	4	1
財務活動によるキャッシュ・フロー	283	305
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	437	12
現金及び現金同等物の期首残高	8,563	8,285
新規連結に伴う現金及び現金同等物の増加額	9	109
現金及び現金同等物の四半期末残高	8,136	8,406

【注記事項】

(連結の範囲又は持分法適用の範囲の変更)

第1四半期連結会計期間より、株式会社明光キャリアパートナーズ及び株式会社Reverseの重要性が増したため、連結の範囲に含めております。

(四半期連結損益計算書関係)

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりであります。

	前第2四半期連結累計期間 (自 2022年9月1日 至 2023年2月28日)	当第2四半期連結累計期間 (自 2023年9月1日 至 2024年2月29日)
広告宣伝費	207百万円	178百万円
販売促進費	411百万円	346百万円
貸倒引当金繰入額	10百万円	12百万円
役員報酬	156百万円	174百万円
給料及び手当	224百万円	264百万円
賞与引当金繰入額	33百万円	41百万円
退職給付費用	3百万円	5百万円
役員株式給付引当金繰入額	8百万円	9百万円
株式給付引当金繰入額	3百万円	-
支払手数料	173百万円	207百万円
減価償却費	22百万円	27百万円
賃借料	141百万円	171百万円
のれん償却額	64百万円	67百万円

(四半期連結キャッシュ・フロー計算書関係)

現金及び現金同等物の四半期末残高と四半期連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係は、次のとおりであります。

	前第2四半期連結累計期間 (自 2022年9月1日 至 2023年2月28日)	当第2四半期連結累計期間 (自 2023年9月1日 至 2024年2月29日)
現金及び預金	8,331百万円	8,597百万円
預入期間が3か月超の定期預金	195百万円	190百万円
現金及び現金同等物	8,136百万円	8,406百万円

(株主資本等関係)

前第2四半期連結累計期間(自 2022年9月1日 至 2023年2月28日)

1. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2022年10月31日 取締役会(注)	普通株式	利益剰余金	278	11.00	2022年8月31日	2022年11月21日

(注) 配当金の総額には、「役員向け株式交付信託」及び「従業員向け株式交付信託」が所有する当社株式に対する配当金2百万円が含まれております。

(2) 基準日が当第2四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第2四半期連結会計期間の末日後となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2023年4月13日 取締役会(注)	普通株式	利益剰余金	304	12.00	2023年2月28日	2023年5月9日

(注) 配当金の総額には、「役員向け株式交付信託」及び「従業員向け株式交付信託」が所有する当社株式に対する配当金1百万円が含まれております。

2. 株主資本の著しい変動

株主資本の金額は、前連結会計年度末日と比較して著しい変動がありません。

当第2四半期連結累計期間(自 2023年9月1日 至 2024年2月29日)

1. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2023年10月12日 取締役会(注)	普通株式	利益剰余金	304	12.00	2023年8月31日	2023年11月20日

(注) 配当金の総額には、「役員向け株式交付信託」が所有する当社株式に対する配当金1百万円が含まれております。

(2) 基準日が当第2四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第2四半期連結会計期間の末日後となるもの

決議	株式の種類	配当の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2024年4月11日 取締役会 (注)1.2	普通株式	利益剰余金	557	22.00	2024年2月29日	2024年5月8日

(注)1. 配当金の総額には、「役員向け株式交付信託」が所有する当社株式に対する配当金3百万円が含まれております。

2. 2024年4月11日取締役会決議による1株当たり配当額には、当社創業40周年記念配当10円00銭が含まれております。

2. 株主資本の著しい変動

株主資本の金額は、前連結会計年度末日と比較して著しい変動がありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前第2四半期連結累計期間(自 2022年9月1日 至 2023年2月28日)

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報並びに収益の分解情報

(単位: 百万円)

	報告セグメント				その他 (注)	合計
	明光義塾 直営事業	明光義塾 フランチャ イズ事業	日本語学校 事業	計		
売上高						
一時点で移転される財又はサービス	328	744	-	1,072	929	2,002
一定の期間にわたり移転される 財又はサービス	6,078	1,379	539	7,997	448	8,446
顧客との契約から生じる収益	6,407	2,123	539	9,070	1,378	10,448
その他の収益	-	-	-	-	-	-
外部顧客への売上高	6,407	2,123	539	9,070	1,378	10,448
セグメント間の内部 売上高又は振替高	-	463	-	463	149	612
計	6,407	2,586	539	9,533	1,527	11,061
セグメント利益又は損失()	754	773	53	1,580	87	1,492

(注) 「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、キッズ事業(アフタースクール)、R E D事業、明光キッズe事業、HRソリューション事業、連結子会社株式会社古藤事務所、連結子会社S i m p l e株式会社等が含まれております。

2. 報告セグメントの利益又は損失の金額の合計額と四半期連結損益計算書計上額との差額及び当該差額の
主な内容(差異調整に関する事項)

(単位: 百万円)

利益	金額
報告セグメント計	1,580
「その他」の区分の利益	87
全社費用(注)	616
四半期連結損益計算書の営業利益	876

(注) 全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない親会社本社の総務部門等管理部門に係る費用であります。

3. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

該当事項はありません。

当第2四半期連結累計期間（自 2023年9月1日 至 2024年2月29日）

1. 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報並びに収益の分解情報

（単位：百万円）

	報告セグメント				その他 (注)	合計
	明光義塾 直営事業	明光義塾 フランチャ イズ事業	日本語学校 事業	計		
売上高						
一時点で移転される財又はサービス	357	755	-	1,113	1,114	2,227
一定の期間にわたり移転される 財又はサービス	6,372	1,321	667	8,360	559	8,920
顧客との契約から生じる収益	6,730	2,077	667	9,474	1,674	11,148
その他の収益	-	-	-	-	-	-
外部顧客への売上高	6,730	2,077	667	9,474	1,674	11,148
セグメント間の内部 売上高又は振替高	-	468	-	468	192	660
計	6,730	2,545	667	9,942	1,866	11,808
セグメント利益又は損失()	817	651	111	1,580	52	1,527

(注) 「その他」の区分は報告セグメントに含まれない事業セグメントであり、キッズ事業(アフタースクール)、R E D事業、明光キッズe事業、HRソリューション事業、連結子会社株式会社古藤事務所、連結子会社 S i m p l e 株式会社等が含まれております。

2. 報告セグメントの利益又は損失の金額の合計額と四半期連結損益計算書計上額との差額及び当該差額の
主な内容(差異調整に関する事項)

（単位：百万円）

利益	金額
報告セグメント計	1,580
「その他」の区分の利益	52
全社費用(注)	681
四半期連結損益計算書の営業利益	845

(注) 全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない親会社本社の総務部門等管理部門に係る費用であります。

3. 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

前連結会計年度まで非連結子会社でありました株式会社明光キャリアパートナーズ、株式会社 R e v e r s e は重要性が増したため、第1四半期連結会計期間より連結の範囲に含めております。
これにより、「その他」セグメントにおいて、のれんの増加額は29百万円となりました。

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を分解した情報は、「注記事項(セグメント情報等)」に記載のとおりであります。

(1株当たり情報)

1株当たり四半期純利益及び算定上の基礎

項目	前第2四半期連結累計期間 (自 2022年9月1日 至 2023年2月28日)	当第2四半期連結累計期間 (自 2023年9月1日 至 2024年2月29日)
1株当たり四半期純利益(円)	26.20	20.62
(算定上の基礎)		
親会社株主に帰属する四半期純利益(百万円)	657	519
普通株主に帰属しない金額(百万円)	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する四半期純利益(百万円)	657	519
普通株式の期中平均株式数(株)	25,106,488	25,207,437

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり四半期純利益については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 「1株当たり四半期純利益」の算定上、株主資本において、自己名義所有株式の他、自己株式として計上されている「役員向け株式交付信託」及び「従業員向け株式交付信託」が所有する当社株式を期中平均株式数の計算において控除する自己株式に含めております。(前第2四半期連結累計期間「役員向け株式交付信託」141,000株、「従業員向け株式交付信託」21,800株、当第2四半期連結累計期間「役員向け株式交付信託」141,000株)

(重要な後発事象)

取得による企業結合

当社は、2024年2月28日開催の取締役会において、株式会社ランウェルネスの全株式を取得し、子会社化することについて決議し、2024年2月29日付で、株式譲渡契約を締結し、2024年3月26日付で全株式を取得しました。

(1) 企業結合の概要

被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称：株式会社ランウェルネス

事業の内容：児童発達支援事業

企業結合を行った主な理由

当社は、「教育・文化事業への貢献を通じて人づくりを目指す」「フランチャイズノウハウの開発普及を通じて自己実現を支援する」という2つの経営理念と、「個別指導による自立学習を通じて創造力豊かで自立心に富んだ21世紀社会の人材を育成する」という教育理念を掲げ、創業以来これらの理念を大切にしながら、「自立学習」、「個別指導」方式による個別指導塾「明光義塾」の直営及びフランチャイズシステムでの全国展開に取り組んでまいりました。そして、この創業の理念を「創業の精神」として引継ぎながら、Purpose” “「やればできる」の記憶をつくる”を起点として、社会環境の急速な変化に対応すべく、時代のニーズを見据えたサービスを提供する様々な事業を創造し、「人の可能性をひらく企業グループ」に成長することを目指しています。

一方、株式会社ランウェルネスは、株式会社ランシステムの子会社として2015年10月に設立されました。ランシステムグループの経営理念である「人を豊かに・地域を豊かに・社会を豊かに」を基本理念とし、放課後等デイサービス・児童発達支援事業所「ハッピーキッズスペースみんと」を神奈川・埼玉・東京において、現在13施設を運営しております。

株式会社ランウェルネスの児童発達支援事業における立ち上げ・運営のノウハウと、当社が個別指導塾「明光義塾」の直営・フランチャイズでの展開や、学童保育事業を推進する中で培ってきたアセット・ノウハウを掛け合わせることで、シナジー効果を発揮して「人の可能性をひらく企業グループ」への成長ドライバーとなると判断いたしました。

また、通常の学級に在籍する小中学生のうち、学習面又は行動面で著しい困難を示す割合が増加傾向にあり、一人ひとりの児童生徒の特性に応じた支援が求められる状況にあります。そのような中で、個別指導塾「明光義塾」を展開してまいりました当社が、この社会的課題に取り組むために新たに「児童発達支援事業」に参入することで、一人ひとりの児童生徒に寄り添い、当社の“Vision” “Bright Light for the Future” 人の可能性をひらく企業グループとなり輝く未来を実現する」を実践してまいりたいと考えております。

企業結合日

2024年3月26日

企業結合の法的形式

株式取得

結合後企業の名称

名称の変更はありません。

取得した議決権比率

100%

取得企業を決定するに至った主な根拠

当社が現金を対価として株式を取得したことによるものです。

(2) 被取得企業の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価	現金	380百万円
取得原価		380百万円

(3) 発生したのれんの金額、発生原因、償却方法及び償却期間

現時点では確定しておりません。

(4) 企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債の額並びにその主な内訳

現時点では確定しておりません。

2【その他】

- (1) 当四半期連結会計期間終了後の状況
特記事項はありません。

(2) 中間配当

第40期（2023年9月1日から2024年8月31日まで）中間配当について、2024年4月11日開催の取締役会において、2024年2月29日の株主名簿に記録された株主に対し、次のとおり中間配当を行うことを決議いたしました。

配当金の総額	557百万円
1株当たりの金額	22円
支払請求権の効力発生日及び支払開始日	2024年5月8日

（注）1株当たりの金額には、当社創業40周年記念配当10円が含まれております。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の四半期レビュー報告書

2024年4月12日

株式会社明光ネットワークジャパン
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人
東京事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 池内 基明

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 甲斐 靖裕

監査人の結論

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、「経理の状況」に掲げられている株式会社明光ネットワークジャパンの2023年9月1日から2024年8月31日までの連結会計年度の第2四半期連結会計期間（2023年12月1日から2024年2月29日まで）及び第2四半期連結累計期間（2023年9月1日から2024年2月29日まで）に係る四半期連結財務諸表、すなわち、四半期連結貸借対照表、四半期連結損益計算書、四半期連結包括利益計算書、四半期連結キャッシュ・フロー計算書及び注記について四半期レビューを行った。

当監査法人が実施した四半期レビューにおいて、上記の四半期連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して、株式会社明光ネットワークジャパン及び連結子会社の2024年2月29日現在の財政状態並びに同日をもって終了する第2四半期連結累計期間の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を適正に表示していないと信じさせる事項が全ての重要な点において認められなかった。

監査人の結論の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に準拠して四半期レビューを行った。四半期レビューの基準における当監査法人の責任は、「四半期連結財務諸表の四半期レビューにおける監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、結論の表明の基礎となる証拠を入手したと判断している。

四半期連結財務諸表に対する経営者及び監査等委員会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して四半期連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない四半期連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

四半期連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業的前提に基づき四半期連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査等委員会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

四半期連結財務諸表の四半期レビューにおける監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した四半期レビューに基づいて、四半期レビュー報告書において独立の立場から四半期連結財務諸表に対する結論を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に従って、四半期レビューの過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 主として経営者、財務及び会計に関する事項に責任を有する者等に対する質問、分析的手続その他の四半期レビュー手続を実施する。四半期レビュー手続は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して実施される年度の財務諸表の監査に比べて限定された手続である。

- ・ 継続企業の前提に関する事項について、重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められると判断した場合には、入手した証拠に基づき、四半期連結財務諸表において、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して、適正に表示されていないと信じさせる事項が認められないかどうか結論付ける。また、継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、四半期レビュー報告書において四半期連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する四半期連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、四半期連結財務諸表に対して限定付結論又は否定的結論を表明することが求められている。監査人の結論は、四半期レビュー報告書日までに入手した証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。

- ・ 四半期連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠していないと信じさせる事項が認められないかどうかとともに、関連する注記事項を含めた四半期連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに四半期連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示していないと信じさせる事項が認められないかどうかを評価する。

- ・ 四半期連結財務諸表に対する結論を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する証拠を入手する。監査人は、四半期連結財務諸表の四半期レビューに関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査人の結論に対して責任を負う。

監査人は、監査等委員会に対して、計画した四半期レビューの範囲とその実施時期、四半期レビュー上の重要な発見事項について報告を行う。

監査人は、監査等委員会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

(注) 1 上記の四半期レビュー報告書の原本は当社(四半期報告書提出会社)が別途保管しております。

2 XBRLデータは四半期レビューの対象には含まれていません。